Osaka University Knowledge Archive

Title	〈書評〉臨床仏教研究所編『「臨床仏教」入門』
Author(s)	髙瀬, 顕功
Citation	宗教と社会貢献. 2014, 4(1), p. 67-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27459
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

臨床仏教研究所編

『「臨床仏教」入門』

白馬社、2013 年 11 月 15 日刊行、A5 判、309 頁、2,500 円＋税

髙瀬 顕功*

1. 本書について

本書は、臨床仏教研究所（以下、臨仏研）が運営する臨床仏教師公開講座の内容を収録した講演録である。臨仏研は、仏教精神にもとづいた青少年の育成をめざす全国青少年教化協議会（以下、全青協）の附置研究所であり、2008 年の研究所設立以来、寺院の公益性や仏教の社会貢献についての研究や提言をおこなってきた。当該研究所は 2013 年春、「臨床仏教師養成プログラム」を立ち上げ、現代社会の諸問題に取り組む仏教者の育成、資格認定をおこなっている。このプログラムは、①臨床仏教公開講座（15 時間）、②ワークショップ（30 時間）、③実践研修（100 時間）の 3 つのカリキュラムから構成され、本書はこのうちの①臨床仏教公開講座の全 10 回の講演をまとめたものである。

公開講座は 1 回ごとに講師が変わり、ひきこもり支援、路上生活者支援、ターミナルケアといったような社会の現場ですでに活動をおこなっている仏教者たちが担当する。第一期臨床仏教師養成プログラムは現在、②ワークショップまでが終了し、実践研修に向けた準備が進んでいる。また、2014 年 4 月以降、第二期臨床仏教師養成プログラムの募集が始まるという。

臨仏研が定義する「臨床仏教師」とは、「個の霊的な領域および人間の生老病死にまつわる様さまざまな社会環境に向き合う、あるいは寄り添う仏教者」（p.18）のことであり、具体的には、教育、福祉、医療などの分野において、実践的に現場に関わる仏教者を指している。本養成プログラムは CPE（Clinical Pastoral Education：臨床牧会教育）プログラムの仏教版として、仏教者が現場に携わる際に必要な知識、姿勢、実践方法を教授するものであり、本書がカバーする公開講座（全 10 回）はこのうちの「知識」の習得にあたるものである。

* 大正大学 BSR 研究所研究員　pratyaya@mac.com

2. 構成と内容

本書には章番号がなく、公開講座の各演題がそのまま見出しとして用いられている。全 10 講が全て収録されているが、第 1 講の開講記念シンポジウムと第 10 講の総括の順番を入れ替えてある以外は、開講順にしたがって構成されている。

本書の構成をタイトルと執筆者（講師）を以下に記し、各講演録の内容を簡単に紹介しよう。

目次

まえがき
現在社会における臨床仏教師の役割
　　― 臨床仏教の検証（神仁）
不登校・ひきこもり問題
　　― さまよう若者（和田重良）
路上生活者に学ぶ
　　― 共に生きる社会をめざして（吉水岳彦）
医療現場に関わる宗教者
　　― ターミナルケア（大河内大博）
足湯と傾聴から見えるもの
　　― 仏教と災害支援（辻雅榮）
つながる宗教者
　　― ネットワーキング型支援の可能性（島薗進）
過疎化・自死・孤独死
　　―「無縁社会」から「有縁社会」へ（袴田俊英）
なぜ犯罪は起こるのか？
　　― 教誨師から見たこころと社会　（深井三洋子）
宗教が苦となる現場
　　― 「破壊カルト」に走る人びと（楠山泰道）
現在社会と臨床仏教
　　― 開講記念シンポジウム
　　（千石真理、藤尾聡允、ジョナサン・ワッツ、蓑輪顕量、神仁）

なぜ今、臨床仏教なのか
　　― パネルディスカッション
全青協活動と臨床仏教　（齋藤昭俊）
年表

本書の冒頭を飾るのは、臨仏研の上席研究員である神仁の講演である。神は、慈悲の理想は説くけれどもその実践について適切なガイドを示さないことを「仏教の致命的な弱点」（中村元）とし、慈悲の実践という観点から「臨床仏教」を提唱する。ここで、神は「臨床仏教師」を「個の霊的な領域および人間の生老病死にまつわる様さまざまな社会環境に向き合う、あるいは寄り添う仏教者」（p.18）と定義している。また、台湾で国立大学病院のホスピスで活動する僧侶の事例を紹介し、医療現場におけるスピリチュアルケアの必要性、仏教者の役割を示す。

和田重良は神奈川県丹沢山中に共同生活の宿舎を運営し、30 年にわたって、ひきこもり・不登校児の支援をおこなってきた。ここでは和田自身の経験にもとづいた子供たちへの接し方が紹介されている。長年の経験を通じて、生活のなかでの宗教性の大切さを主張する和田は、読経のような宗教行為が社会復帰のステップとしても役立つという。

吉水岳彦は、山谷・浅草地区で路上生活者支援に取り組む僧侶である。ここでは葬送支援から始まった仏教者による路上生活者支援団体「ひとさじの会」の経緯が紹介されている。また吉水は、路上生活者支援、活動を通じた学びにくわえ、岩手県気仙地域でおこなわれている「祈りの道再興プロジェクト」についても言及している。このプロジェクトは、震災後、気仙地域にかつてあった霊場を復興し、慰霊の巡礼をおこなうことで、僧侶ならではの地域復興、グリーフワークをめざすものである。

大河内大博は大阪でビハーラ活動（仏教を基盤としたターミナルケア）を展開する僧侶である。大河内の活動は、臨仏研のめざす「臨床仏教師」のモデルにかなり近いものといえる。ホスピスでスピリチュアルな痛みに耳を傾ける活動は、神の講演録に登場する台湾の「臨床宗教仏教師」そのものであるといえよう。大河内は自らの経験談の他に、スピリチュアルケアについての技法、公立病院というパブリックな場での仏教者のあり方について、実践者の立場から示している。

辻雅榮は東日本大震災直後から「足湯隊」を結成し、被災地で足湯を通した傾聴ボランティアをおこなってきた。足湯の淵源は光明皇后の湯施行、『金光明最勝王経』に説かれた呪薬洗浴法にさかのぼるという。高野山足湯隊には、高野山大学で密教福祉学を学んだ僧侶や看護師、アロマセラピストが参加し、被災者のケアにあたる。辻は、ある被災者の「つぶやき」から、「支援者－非支援者」という関係性にとらわれない、慈悲の実践こそが菩薩道なのだという気づきを得たという。

宗教学者の島薗進は、震災後、宗教者による被災地支援活動がより円滑におこなわれるようにするため、超宗教・超宗派の宗教者災害支援連絡会という組織を立ち上げた。この講演録では、被災地での数々の活動が紹介されるとともに、慰霊、供養といった宗教的支援が、心のケアへと展開していくことが述べられている。また、宗派の枠を超えたネットワークで活動をおこなうことが、自治体や地域社会での活動を円滑にするといい、宗教間の連携、協力を奨励する。

袴田俊英は、秋田県藤里町でコーヒサロンや赤提灯を通じたコミュニティ再生に取り組んでいる。秋田県は人口 10 万人あたりの自殺率が 15 年連続で日本一を記録した。藤里町の自殺率はその秋田県の値より 2 倍ほど高い。袴田は、この背景に農村の近代化と農業の機械化によるコミュニティの崩壊があると指摘する。そこで「心といのちを考える会」を立ち上げ、地域の人々の交流を促進し、自死、孤独死、ひきこもりの原因である「孤立」を防ぐ取り組みをおこなっている。

深井三洋子は東京・立川拘置所に所属する教誨師として活動している。在家出身の彼女は、信心深いサラリーマンの家庭で育ち、30 歳を前にして出家した。現在、大学や高校で教壇に立ちながら、矯正施設での説教をおこなっている。深井は、教誨師として説教をする者と収容者として話を聞く者、両者の差は紙一重であるという。また、刑期を終えた受刑者の社会復帰のむずかしさを伝える。一方で、若者との間に倫理観のギャップを感じ、どう接していけばいいのかという自身の「苦しみ」も吐露している。

楠山泰道は、オウム真理教による事件をきっかけに弁護士、宗教社会学者らと「日本脱カルト協会」を立ち上げ、カルト問題に取り組んできた。楠山は、宗教の本来の目的は共同幻想にとらわれない個の覚醒と自立を促すことであるといい、生きることへの実践的な宗教観を与えることによっ

て、多くの人のカルト脱会を成功させてきた。カルトへの入信の背景には、精神的な不安や葛藤にくわえ、孤独、孤立といった人間関係の希薄化もあるという。

最後（講座開講順でいえば「最初の」だが）の「開講記念シンポジウム」では、アメリカで病院チャプレンとして活動していた千石真理、自死念慮者の相談や遺族へのグリーフケアをおこなう藤尾聡允、終末期ケアとチャプレン養成の研究をおこなっているジョナサン・ワッツの 3 名をパネリストに、東京大学大学院教授の簑輪顕量をコメンテーターに迎え、臨床仏教師の先駆的な取り組みの紹介、臨床仏教師の役割、そして日本での臨床仏教師の可能性について交わされた議論が収録されている。また巻末には、全青協事務総長である齋藤昭俊によって、全青協のあゆみ、臨仏研の設立目的などがまとめられている。

3. 本書に対するコメント

近年、社会問題に取り組む僧侶や寺院を活用した社会貢献のあり方など多くの本が出版されている［上田 2004；高橋 2009；秋田 2011；磯村 2011；北川 2011；臨仏研 2012 など］(1)。また、インターネットの普及により、社会問題に取り組む僧侶、宗教者たちが、宗派、教団の枠を超えて直接つながるようになってきた。東日本大震災後、数々の宗教施設が被災者を受け入れ、多くの宗教者たちが支援活動に東奔西走する様子も広く認知されつつある。このような背景をもとに、パブリックな場で活躍するための仏教者・宗教者養成プログラムができつつあることは時代の潮流といってもよいかもしれない。臨床仏教師養成講座に先駆けて、2012 年に東北大学で開講された臨床宗教師養成講座（実践宗教学寄附講座）もその一例であるといえよう。

事例の紹介、仏教者への啓発から、より具体的な養成プログラムへの展開は、宗教の社会貢献を考えるうえで大きなステップのように思える。社会問題にかかわる僧侶のあり方として「臨床仏教師」という言葉を定義し、社会に紹介したという点だけでも本書は注目に値する。しかしながら、本書は養成講座の第一カリキュラム（公開講座 10 回）をまとめたものということもあり、「どのように臨床宗教師になるか」というよりも「どのような

臨床仏教師がいるか」といった事例の紹介にとどまっている感は否めない（一部の講師はスキルも伝えているが）。

本書では、ひきこもり、自死、貧困、終末期医療、矯正施設、カルトといった様々な問題に取り組む各講師が自身の活動を紹介しているが、そこには通底して孤独、孤立という人間関係の希薄化がある。そして、各講師が活動で目指すものは、つながりの回復であり、つながれる場の創出であるといえよう。いいかえれば、それぞれの仏教者はつながりが希薄化して表出した諸問題に取り組んでいるともいえる。

つながりの再生、回復は、人間関係が希薄化した現代社会において重要な取り組みであるということに異論はない。しかし、本書で取り上げられた諸活動は、「失ったものを取り戻す」という対処療法的な営みであるように思われる。これとは逆に、つながりを減退させない「予防」という観点からの臨床があってもいいのではないだろうか。本書では、すでにあるつながりを維持、あるいは増強させるというような取り組みは紹介されなかったが、たとえば、寺院をベースに児童教化、地域コミュニティの活性化などの活動をおこなう仏教者を講師陣にくわえてもよかったのではないかと思う。

内容に関するいくつかの問題を指摘したものの、本書がもつ意義は十分に深い。つながりの創出は、苦を抱える当事者との関係性だけでおこなわれるものではない。島薗が、復興支援活動をおこなう宗教者同士のネットワーク構築が大切だというように、臨床を志す仏教者同士がつながることもまた必要である。そういう意味では、臨床仏教師養成講座が、志を一にする仏教者同士を引き合わせたということは評価されるべきである。公開講座をまとめた本書も、次なる臨床仏教師の発掘をおこない、彼らのネットワーク構築に寄与するものであろう。

最後に、臨床仏教師養成に関して評者が気になる点をいくつか指摘する。まずは、臨床仏教師の扱う領域が広範にまたがっているという点である。神は臨床仏教師の活躍の場を「生老病死にまつわる様さまざまな社会環境」（p.18）としており、実際、本書に収録された各講師のフィールドも多様であった。これは東北大学の「臨床宗教師」がターミナルケア、グリーフケアを活動の場とやや限定的に設定するのと異なる。臨床仏教師養成講座を修了した仏教者が、さまざまなフィールドで活動することが期待される一

方で、多様な現場で活動するための十分な教育がおこなえるかといった疑問も生じる。寄り添いの姿勢は共通に必要であったとしても、それぞれの隣接する他領域（法律、社会福祉、医療、教育など）の知識も必要となり、フィールドごとに求められる技法に違いがあるのではないだろうか。受講生たちは、ワークショップ、実践研修をへて、より専門的な知識と技法を身につけていくのだろうが、養成プログラムとしてはやや拡散しすぎではないかという懸念がある。

資格認定に関する問題もある。臨床仏教師という資格を認定する以上、受講する仏教者の意志や熱意だけでなく、ときには冷静に適性を測らなければならない。それぞれの現場において求められる知識、スキルを備えていることは当然ながら、臨床仏教者として望ましい態度を備えているか、寄り添いの姿勢は十分であるかといった点もきわめて重要である。苦の現場にかかわる以上、たんに必要カリキュラムを修了すればいいというわけではない。資格認定機関である臨仏研は、その責任を負うことになる。臨床仏教師の質をどう担保するのか、「慈悲の実践方法」を示す本講座が資格認定に際して「峻別」をおこなえるのか、こういった点も注目したいところである。

また、臨床仏教師の活動場所の確保ということも考えなければならない問題のひとつだろう。前述のように臨床仏教師のフィールドは多岐にわたる。しかし、すでに種々の現場に携わる仏教者にとって、活動場所は提供されたものではない。みずから求め、切り拓いていったケースであることが多い。今後、多くの臨床仏教師を育成、輩出するにあたって、彼らが活躍できるような受け皿を用意するのか、あるいは彼ら自身の自助努力に任せるのか、資格取得後の道筋も考えなければならないだろう。もし公的機関との協働を展開させたいのなら、よりいっそう臨床仏教師の質を担保しなければならない。

以上、本書の書評にくわえ、臨床仏教師そのものに対する評者のコメントも付した。評者自身、僧籍をもち、社会問題にかかわる身であるので、臨床仏教師には興味と期待を寄せている。公的領域に仏教者としてかかわること、そして現代社会の苦の現場で活躍できるような仏教者を育成するということは、大きな挑戦であることは間違いない。本書は、その取り組みの事始めを記したものであり、社会にかかわっていこうとする仏教者の

意志表明であるように思える。一研究者としても、今後の展開に期待をよせ見守りたいと思う。

註

(1) このうち、磯村［2011］、秋田［2011］、北川［2011］、臨仏研［2012］の各書籍は、本電子ジャーナルでも書評がされている。

参考文献

秋田光彦 2011『葬式をしない寺 大阪・應典院の挑戦』新潮新書。
磯村健太郎 2011『ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む』岩波書店。
上田紀行 2004『がんばれ仏教 お寺ルネサンスの時代』NHK 出版。
北川順也 2011『お寺が救う無縁社会』幻冬舎ルネッサンス。
高橋卓志 2009『寺よ、変われ』岩波書店。
臨床仏教研究所編 2012 『社会貢献する仏教者たち ツナガリ社会の回復に向けて』白馬社。